詳にせざめり、此にても其訛を傳て、殊に脈學を主とする者は、深く泥て實事には愈疎くて、大方の醫は、謾に病人の手を按て、知がほに玄なしつゝ過めれど、實には知難き物と思定て、是を明めんとする人を、却て愚なるが如にさへ云めるは、いとも〳〵歎はしきわざかな、抑精神を助て、渾身の活動をなす物は、氣と血と也、氣血同物にて、氣は血中に起り、血は氣裏に成て、各後れ先だゝず、起居ること、雲と雨との如く、軀を循環ときは、血其體にて、血の脈に流るゝこと、猶川の水有が如し、〇略中若いさゝかも病有時は、其源異なりといへども、皆血に關らざるはなく、既に血に關れば、血卽病體となる也、其病體を候んとするには、其血の動靜と、其血の色とを見に如はなし、其血の動靜を候は脈也、其血色を相は舌唇也、血は形にして、脈舌は影也、形影相離ざる物なれば、其影を見て其體を知、是より邇はなし、〇略中さて舌唇は、喜怒の顏に形はるゝが如、腹臟の表なれば、腹內を穿見たらんよりは著かりなん、譬ば舌唇は肉の如、邪氣は火の如、其赤肉を一炙れば白く、二炙れば黃に、三炙れば黑くなるが如し、又痼疾は脊に著て蟠れるものなれば、其脊の方より、腹へかけて、形のあらはるれば、病所在を知んには、其本なる脊を候に如はなし、我脊を相るわざを發明シえて物するに、其益少からず、然か眼前其活人の相を徵として、活る病を治るわざにしあれば、さてこそ取もあへず神ながら自然なる術にて、皇國外國古今の學にも論にも及ばず、かばかり實事に捷逕はなけれ、熟く此義を得れば、我住庵の邊に生たる草木を採ても、萬病は治得べし、

〔壎囊抄七〕七種ノ死脈トハ何ゾ　彈石脈　解索脈　雀啄脈　屋漏脈　蝦遊脈　魚翔脈　釜沸脈

是ヲ七種ノ惡脈ト云也、此等ノ死脈ヲバ、必ズ少シモ可心得事トナン申メリ、爲我若シハ看病ノタメ可存知事ト云々、

〔黃帝內經靈樞九〕論疾診尺篇第七十四〇略中

診脈